“つながる”・“ひろがる”
支援団体連携セミナー

期　日　　令和7年5月28日（水）
会　場　　福岡県吉塚合同庁舎 8階 803会議室

主　　催 ： 福岡県（コラボステーション福岡）
企画・運営 ： 社会福祉法人 福岡県社会福祉協議会
協　　力 ： 災害支援ふくおか広域ネットワーク（Fネット）

日 程 表

時 間	内 容	講師等	頁
10:30～ 10:35	開　会	福岡県	
10:35～ 12:00	基調講演 「多様な主体の連携による 被災者支援の必要性」	災害支援ふくおか広域 ネットワーク(Fネット) 会長　平川　文　氏	7
12:00～ 13:00	昼食休憩		
13:00～ 14:30	パネルディスカッション 「被災者支援 ～広川町でのつながり～」	【パネリスト】 広川町役場 福祉課長　小松　朋雄　氏 広川町社会福祉協議会 次長　江口　信也　氏 エフコープ生活協同組合 南部ブロック 高倉　健一郎　氏 【進行】 福岡県社会福祉協議会 災害福祉支援センター	21
14:30～ 14:50	休　憩		
14:50～ 16:30	ワークショップ 「みんなで繋がってできること」	【進行】 福岡県社会福祉協議会 災害福祉支援センター	
16:30～	閉　会		

基調講演

多様な主体の連携による被災者支援の必要性

災害支援ふくおか広域ネットワーク

もくじ

01　オープニング
02　「災害」の“今と昔”の比較
03　「地域社会」の　“今と昔”の比較
04　「支援」の　“今と昔”の比較
05　「連携」の　“今と昔”の比較
06　連携事例
07　未来に向けて

1.　オープニング

Hirakawa　Bun

平川　文

災害支援ふくおか広域ネットワーク
DISASTER RELIEF NETWORK FUKUOKA

平成29年7月九州北部豪雨より

活動開始

・地元応援隊ひまわり設立（現Ｃａｍｐ）_代表
・民間ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｾﾝﾀｰ_杷木ベース設立（閉所）_代表
・一般社団法人Camp_理事
・杷木ボランティアの会_会長
・朝倉市ボランティア連絡協議会_会長
・災害支援ふくおか広域ネットワーク_会長
・総務省消防庁「防災意識向上ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ」語り部
・福岡県職員研修講師
・久留米大学特別演習講師
・北九州市立大学特別講師
・小、中学校ゲストティーチャー
・その他_地域防災訓練講師等

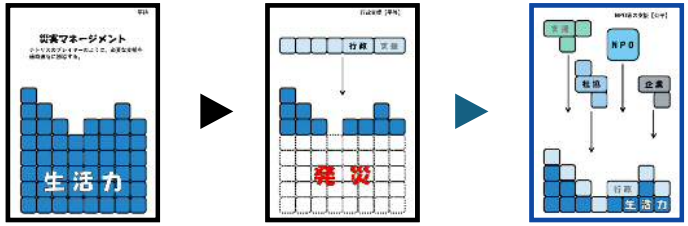
災害支援ふくおか広域ネットワーク
DISASTER RELIEF NETWORK FUKUOKA

災害支援
「ネットワーク」

災害中間支援
「組織」

災害中間支援とは

- 直接支援を支える役割
- 支援資源の適切な誘導



災害中間支援の効果

緩衝材・接着剤としての機能

フェーズガイドとしての機能

今さら聞けない
災害支援キーワード

- 自助・共助・公助の違い
- 防災・減災・レジリエンスの意味
- 支援・受援の関係
- CSR（企業の社会的責任）とBCP（事業継続計画）の位置づけ

自助・共助・公助の違い

自　助	自分の命は、自分で守る。
共　助	近くの人と、助け合う。
公　助	行政や国が、助けてくれる。

防災・減災・レジリエンスの意味

防　災	災害を出来るだけ防ぐ。
減　災	災害による被害を減らす。
レジリエンス	被害を受けても、立ち直る力。

防災・減災・レジリエンスの意味

防災	▶	転ばぬ先の杖	▶	インフラ整備 ▶ 公助力
減災	▶	受け身	▶	備え ▶ 自助力
レジリエンス	▶	回復力	▶	ボランティア ▶ 共助力

支援と受援の関係

支援

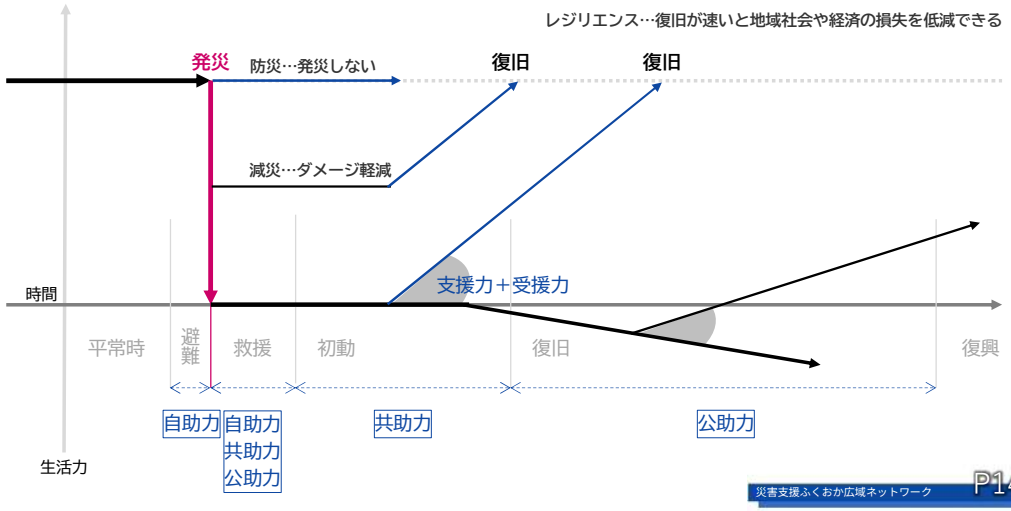
支援者

誰かの困りごとを助けること
行動・想い・仕組みを届ける

受援

被災者

助けを受け入れること
「助けて」が言える力



CSR（企業の社会的責任）とBCP（事業継続計画）の位置づけ

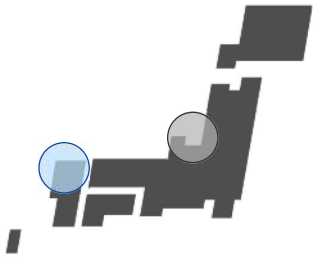
02
「災害」の今と昔の比較

福岡県の災害1999年から今まで

- 1999年　6月_梅雨前線
- 1999年　9月_台風18号
- 2001年　6月_遠賀川集中豪雨
- 2001年　7月_梅雨前線（豪雨）
- 2003年　7月_前線、低気圧（大雨）
- 2004年　8月_台風16号
- 2004年　9月_台風18号
- 2004年　8月_台風23号
- 2005年　3月_西方沖地震（M7.0）
- 2005年　7月_梅雨前線（大雨）
- 2005年　9月_台風14号
- 2006年　9月_台風13号
- 2007年　7月_台風4号
- 2007年　8月_台風5号
- 2007年　7月_中国・九州北部豪雨
- 2010年　7月_梅雨前線（大雨）
- 2011年　6月_梅雨前線（大雨）
- 2012年　4月_暴風
- 2012年　7月_H24.7九州北部豪雨
- 2012年　9月_台風16号
- 2014年　7月_台風8号
- 2016年　4月_熊本地震(M6.5M7.3)
- 2017年　7月_九州北部豪雨
- 2018年　7月_豪雨
- 2019年　8月_大雨
- 2020年　7月_豪雨
- 2021年　8月_大雨
- 2023年　6月_梅雨前線（大雨）

地震：2回
台風：11回
水害：15回

防災の課題「外水氾濫」と「内水氾濫」



日本海側→外水氾濫

冬に雪が多く降り、夏は比較的乾燥する地域だが、近年夏も多くの雨を降らすようになり河川氾濫（外水氾濫）が発生している。

九州北部→内水氾濫

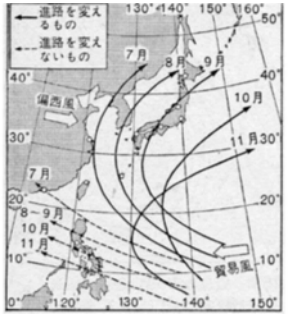
毎年、出水期は多くの雨を降らす。大きな河川は整備が進んでいるが、支川や生活用水路からの内水氾濫が課題になっている。

外水氾濫

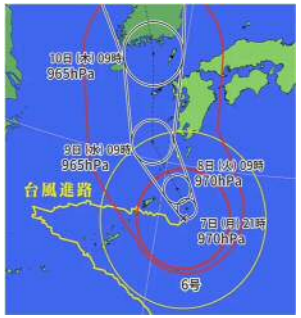
内水氾濫

台風の進路の変化

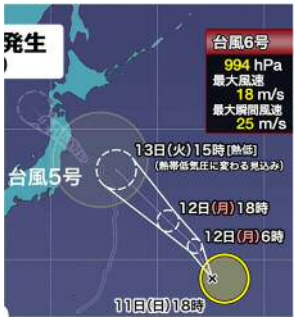
昔の台風進路



Uターン台風



東北台風



46億年の地球環境

200万年の長雨

スノーボールアース

大陸中噴火

【まとめ】　「自然現象」＋「人」＝「自然災害」

自然現象は、大地や海を豊かにし新たな生命を生み出す地球の活動で、その中に人が関わってしまうと災害になる。地球環境は変わるものだと受け止め、人がそれに備える必要がある。

03
「地域社会」の今と昔の比較

昔の地域社会
“足りない”が当たり前だから、「協力する文化」

米づくりに“八十八の手間”

結（ゆい）の精神

お祭りや災害時も“支え合い”が文化

3.　「地域社会」の今と昔の比較

今の地域社会
“便利”になった代わりに、「人がいなくなった文明」

田植えも収穫も機械で少人数化

地域行事・お祭り担い手不足

隣人の顔がわからない

3.　「地域社会」の今と昔の比較

文明が足りないと文化が進み、文明が進むと文化が衰退する

【文化】
モノや制度が未整備な時代、人は人間関係や信頼で問題を解決するしかなかった

昔：平時と有事の差があまりない

【文明】
情報や物流、制度が整い、「人の手を借りなくても生活できる」社会になった

今：平時と有事の差がある

	文化（関係性）	文明（効率性）
昔	○（自然発生的・持続性）	△（労力多く非効率）
今	△（希薄・任意性）	○（情報・物流の高速化）

【まとめ】
「文化の関係性」＋「文明の効率性」＝「新たな連携」（心と技の融合）

04
「支援」の今と昔の比較

4.　「支援」の今と昔の比較

昔の支援
「日常の助け合い」と「生き延びるための共有」

支援者

- ☑ 情報が少ない。
- ☑ 移動手段が乏しい。
- ☑ 近隣地域から。

被災者

- ☑ 生活水準が低い。
- ☑ 寝具、食事で十分。
- ☑ 支援というより生きる為の共有。

今の支援
「期待と基準」が生む「多様な支援」のかたち

被災者

- 生活水準が高く、ギャップを感じる。
- 多種多様な人々。
- プライバシーや心理的安全も必要。

支援者

- SNSで情報発信できる。
- 全国から多様な支援。
- 専門支援チームがある。

“人の支援”から“仕組みの支援”へ

被災者　（受援）
生活水準が高くなり、平時と有事の差を強く感じるようになっている。
必要とされる支援が多様化した。

支援者　（支援）
支援も便利な道具や制度が増えて高度化した。多種な支援が可能になった。

【まとめ】
「支援」と「受援」をつなぐ“連携の仕組み”が必要

05
「連携」の今と昔の比較

昔の連携「地域単位」
家族・隣近所・地域での支え合いが“日常の延長”として連携

自然と生まれる“顔の見える関係”

- 声をかけが当たり前
- 災害時も普段の関係が“支援”に
- ルールや協定がなくても人と人の信頼で動いた

5.　「連携」の今と昔の比較

今の連携「広範囲で多様」
行政・社協・NPO・企業など、立場や役割が異なる中で、計画的な連携

多様化・制度化された“仕組みの中の協働”

- 協定・マニュアル・ネットワーク会議
- 専門性を活かす役割分担（行政／社協／企業／NPO）
- 顔が見えにくい　→　中間支援の役割が重要に

まとめ

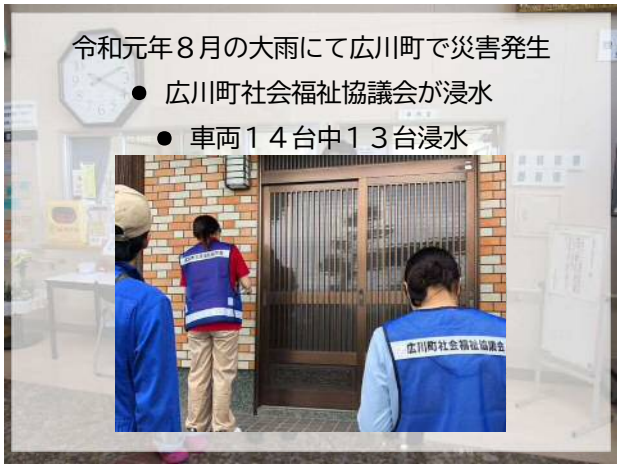
つながりの変遷（へんせん）から考える被災者支援

災　害	災害は「繰り返される」のではなく「変化する」もの、災害対応も変化に合わせる必要がある
地域社会	災害時に地域内だけで対応するのは困難に共助を補う仕組みの必要性
支　援	外部とのつながりによる多様な支援が可能になる。外とつながることができる仕組みが鍵
連　携	昔の連携は「知ってるから動ける」、今の連携は「役割があるから動ける」。つながる必要性を社会に根づかせていくことが必要

06

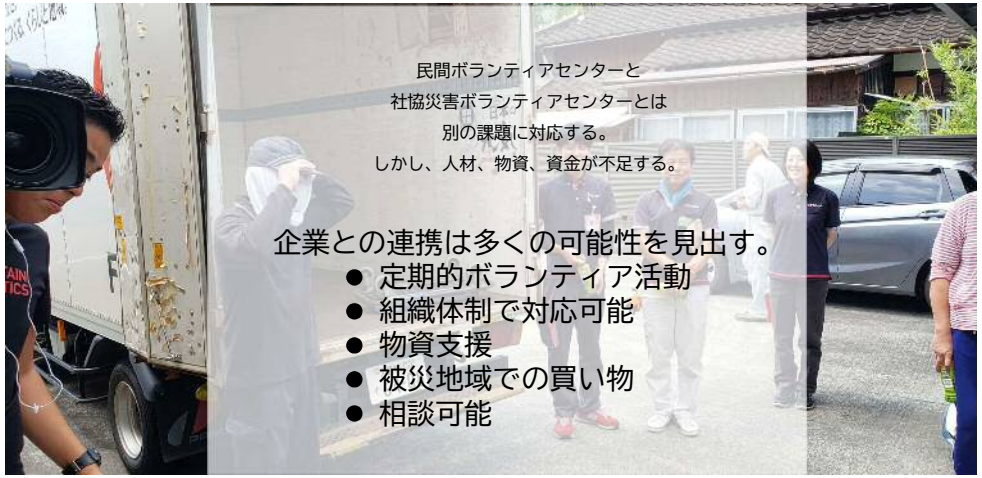
連携事例

6.　連携事例



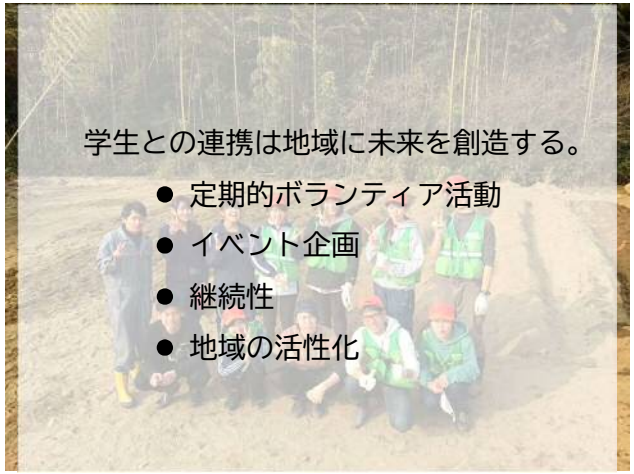
社協　＋　ライオンズクラブ

6.　連携事例



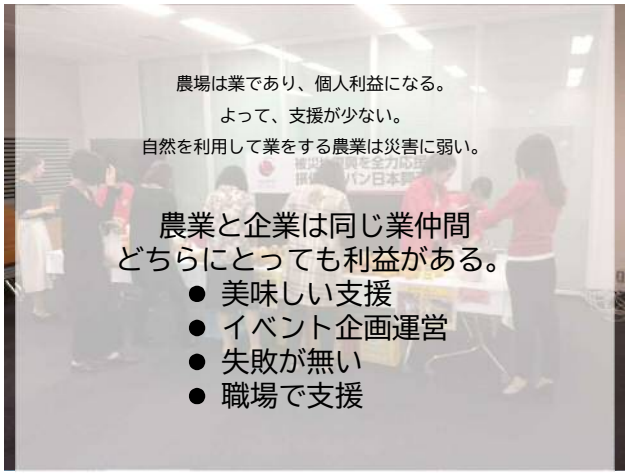
地域（民間ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｾﾝﾀｰ）　＋　企業

6.　連携事例



地域（民間ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｾﾝﾀｰ）×　学生

6.　連携事例

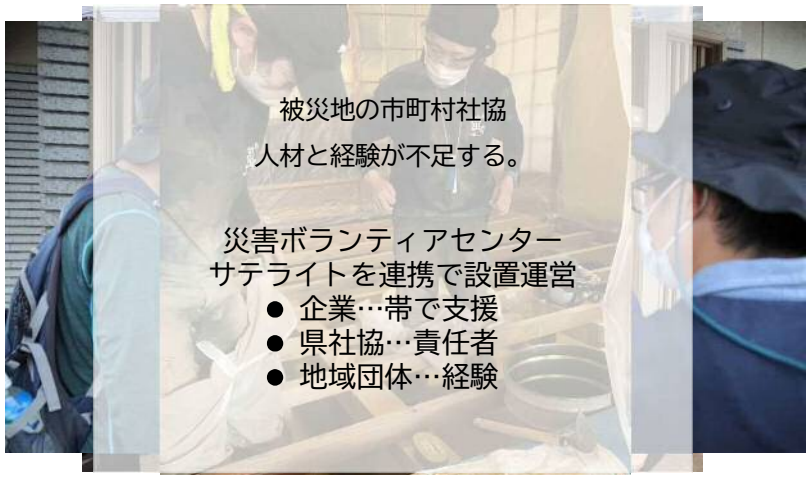


農家　＋　企業

6.　連携事例

行政　＋　社協　＋　ライオンズクラブ　＋　ＪＣＩ

6. 連携事例



社協 ＋ 企業 ＋ 地域団体（#、螢火、Camp）

07

「未来」に向けて

7. 「未来」に向けて

災害支援ふくおか広域ネットワーク
DISASTER RELIEF NETWORK FUKUOKA

災害支援ネットワーク
「つながり」
「多様性」
「関心」

つながり続ける支援活動

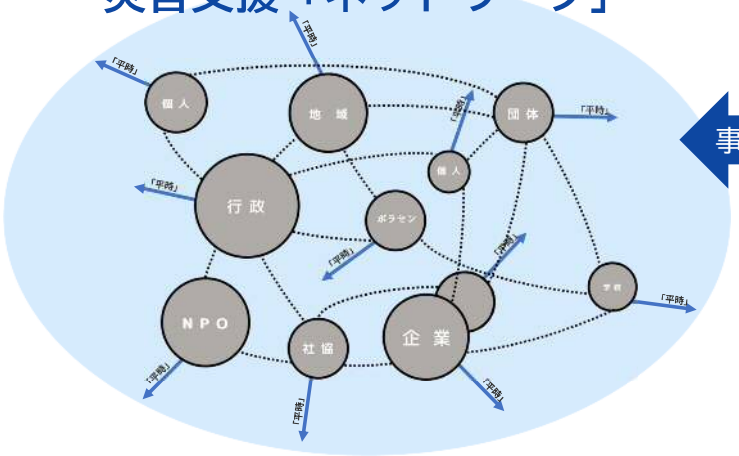
災害中間支援組織
「持続性」
「専門性」
「関係」

補完性の重要性「新たな連携」

7. 「未来」に向けて

【平時】

災害支援「ネットワーク」



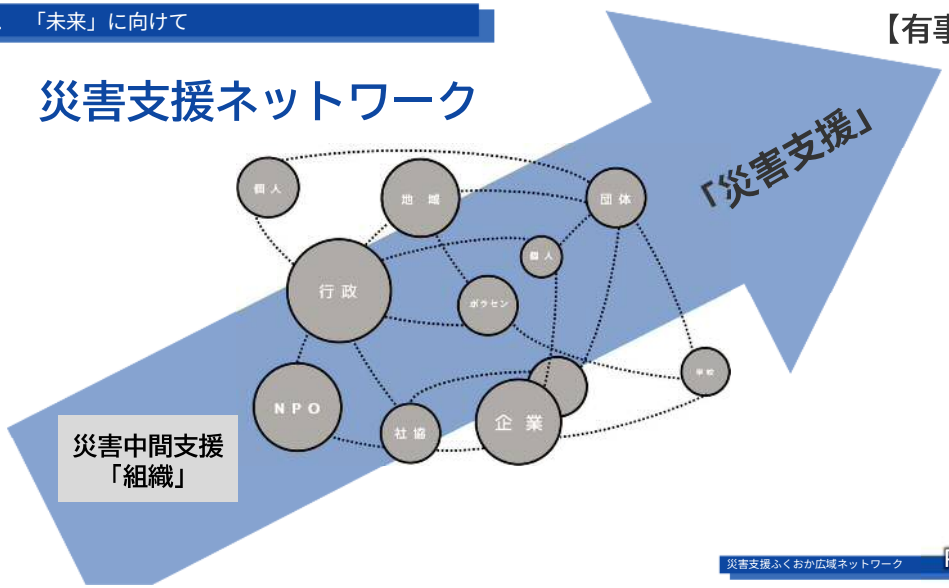
事務局

災害中間支援「組織」

- ネットワーク事務局
- プロボノ育成
- 防災啓発
- シンクタンク

【有事】

災害支援ネットワーク



令和7年度_災害支援の新たな連携

- 新たな「ネットワーク」(F-Ring)
- 新たな「組織」（NPO法人取得）

【MEMO】

パネルディスカッション

被災者支援～広川町でのつながり～

〈パネリスト〉
広川町
広川町社会福祉協議会
エフコープ生活協同組合 南部ブロック

何をつなぎ、どうひろげる？災害時における連携協働実践

社会福祉法人広川町社会福祉協議会

令和5年7月豪雨災害
～広川町災害ボランティアセンター～

広川町災害ボランティアセンター活動実績

【災害ボラセン開設期間】
令和5年7月12日(水)～9月10日(日)

【ニーズ受付件数】
7月12日～9月10日　97件(完了　80件、取下げ　17件)
9月11日～令和6年1月6日　8件(完了　8件)

【活動実績】
7月15日～9月10日　延活動件数:198件　延活動者数:1,372名
9月11日～令和6年1月6日　延活動件数:9件　延活動者数:54名
※ 閉所後の活動は、これまで登録いただいたボランティアの皆様と社協職員で対応しました。

運営支援

広川町、全国社会福祉協議会、福岡県社会福祉協議会、熊本県社会福祉協議会、中央共同募金会、福岡県共同募金会、大牟田市社会福祉協議会、筑後市社会福祉協議会、八女市社会福祉協議会、柳川市社会福祉協議会、みやま市社会福祉協議会、大川市社会福祉協議会、大木町社会福祉協議会、直方市社会福祉協議会、筑紫野市社会福祉協議会、久留米市社会福祉協議会、糸島市社会福祉協議会、那珂川市社会福祉協議会、うきは市社会福祉協議会、大刀洗町社会福祉協議会、宮若市社会福祉協議会、粕屋町社会福祉協議会、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P）、八女青年会議所、宗像青年会議所、公立八女総合病院、社会福祉法人筑陽会、社会福祉法人多聞福祉会、下関東ロータリークラブ、ライオンズクラブ国際協会、日本財団、一般社団法人Camp、広川町職員労働組合、八女市職員労働組合、八女市社会福祉協議会評議会労働組合、福岡県経営者協議会青年会、福岡県自治労、自治労中筑後総支部、JAふくおか八女農業協同組合、有限会社広川衛生社、久留米ヤクルト販売株式会社、キリンビバレッジ株式会社、株式会社中島田鉄工所、エフコープ生活協同組合、株式会社大塚製薬工場、有限会社隈部建設、福岡銀行、筑後信用金庫、つるひさ整骨院、西日本新聞社、RKB毎日放送株式会社、おんが司法書士事務所、大橋鮮魚店、復興支援福岡、認定NPO法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク、災害NGO結、特定非営利活動法人バルビー、被災地NGO協働センター、認定NPO法人日本レスキュー協会、NPO法人有明支縁会、特定非営利活動法人夢と希望、災害ボランティア支援隊決断、巨福山金泉寺、写真洗浄あらいぐま、立花住設、リコンストラクション・ジャパン、広川中学校、上広川小学校、中広川小学校、下広川小学校、広川町消防団、九州大学、八女高等学校、八女農業高等学校、西日本短期大学附属高等学校、八女学院高等学校、筑後北中学校、八女消防本部、広川消防署、YFD、広川町青少年育成町民会議推進部　他

この他にも、たくさんの方々にご協力をいただきました。
ありがとうございました！！

災害支援の本音(リアル)
～被災地(社協)の視点から～

ヒト(人)

- 被災地の人、組織、団体は被災者(にもなりうる)

- 災害が発生したら被災地(者)支援が優先？
＝平常業務も等しく優先度が高い
＝被災地の人、組織、団体として役割を果たせる状態にあるのか

- 災害支援の担い手は誰？
＝被災地の人々(住民、団体、企業、事業所、自治体など様々な主体) どこまでやれる？いつまでやれる？
＝自分たちがやる前提の各種災害対応マニュアルなど

ヒト(人)

被災地(者)支援におけるマンパワーの現実･･･

- 単独の組織、団体では不足するマンパワー

- 災害現場での活動経験(ノウハウ)がある人の質、量

- 関係職員、団体の皆さんの心身の負担と支援の調整
＝被災地の関係職員、団体としての使命感と時間の流れ

- 様々な主体と連携協働したいけど･･･
＝誰とならやれる？どことならやれる？何をやる？

モノ(物)

被災地(者)支援における資機材等の確保～災害ボラセンとして～

- 資機材のストックに限界がある

- 被災地支援(災害ボラセン)における車両確保の重要性

- 機材だけではなく、飲料や食糧品の必要性

- ないモノは作る？必要な資機材には、入手することが難しいモノもある(ミニじょれん、かき板(小)など)

- 水害だけではない「災害」に対応できる資機材の確保

- センターの設置場所は想定どおり？

カネ(資金)

被災地(者)支援には資金が必要～災害ボラセンとして～

- 自治体との協定に基づく資金

- 赤い羽根共同募金を原資とする災害等準備金
＝レンタカーなどを長期に利用する場合は特に注意が必要

- 災害ボラセン閉所後の活動における活動資金は？
＝自治体との協定の範囲外にある支援の財源

被災地(者)支援・・・
被災地の人、組織、団体だけで完結することは難しい・・・
どうする？

どうつながり・どうひろげる？

【ヒト】
・連携を仕組みにすること＝〇〇×□ □ 連携協定、日頃の協働実践
・積極的に平時から専門性・実効性の高い団体(人)と連携しておくこと
【モノ】
・ブロック(エリア)による資機材共有(ストックヤード設置等)
・必要な資機材を必要な時に準備できる仕組み(提供、寄付、寄贈、貸与など)
【カネ】
・被災地(者)支援として活用できる資金の体系化と、基金や募金、クラウドファンディングなどの活用

出来ないこと、苦手なこと、弱いところを見える化する(知る・整理する)こと・・・逆も然り
その先にある連携と協働実践の創造

どうつながり・どうひろげる？

大切なこと・・・
・誰のために、何のために
・視点を合わせる、視線を合わせる
・小さくても大きくても歩みを進める
つまり・・・

心を合わせる

広川町災害
ボランティアセンタ
岩手→福岡
広川町
支援物資
けっぱれ!!!
災害支援
冷却スプレー

FCO·OP

『被災者支援～広川町でのつながり』

エフコープ生活協同組合　　南部ブロック　髙倉

組織概要

エフコープ生活協同組合

本部	福岡県糟屋郡篠栗町中央1-8-3
設立	1983(昭和58)年4月1日
事業エリア	福岡県全域
理事長	堤　新吾
組合員	566,975名(2024年3月末現在)
職員数	フルタイムスタッフ1,412名 定時スタッフ1,778名(2024年3月末現在)
出資金	256.05億円(2024年3月末現在)

FCO·OP

広川町社協・役場・エフコープとの連携事例について

広川町での「移動店舗販売稼働」　背景にあった「想い」

高齢化の進行、商業施設の撤退や高齢者ドライバーの免許自主返納の推奨など、様々な社会的背景により日常的な買い物活動が困難となる、いわゆる「買い物弱者」が増加傾向にあり、広川町でもこの課題を解決するため、高齢者等生活支援体制整備協議会において、高齢者の生活についての「困りごと」の一つである「買い物支援」についての取り組みを検討していました。

さらに広川町の中心にあったＡコープ広川店が令和元年9月末で閉店したこともあり、地域住民の買い物支援策への要望が強く感じられるようになっていました。そのような中、エフコープが「移動店舗販売」を行っているとの情報を知り、広川町では、その課題を一緒に考え、一緒に活動をしていく、という強い「想い」がありました。

「移動店舗販売」実現の「きっかけ」　人・連携・協働・つながる

① 令和元年11月初旬

広川町役場福祉課の職員様から「久留米市上津町に配布されている移動店舗販売チラシを見ました。詳しいことを聞かせて頂きたい」とエフコープへ連絡がありました。

② 令和元年11月中旬

広川町役場様と社会福祉協議会様へ南部ブロック長と職員2名で「エフコープ移動店舗販売」の現状説明に伺いました。「町としても高齢者の買い物支援の問題は大きく、何らかの対応を求められていて、移動店舗販売を実施したい、と思っている」との事でした。

③ 令和2年1月下旬

行橋市で「生活支援コーディネーターの福岡県全体会議」(福岡県60行政区が参加)が開催され、みやま市社協のコーディネーターさんが、エフコープとすすめた移動店舗販売を「成功事例」として発表されました。エフコープ職員も1名参加しており、発表後に各行政の方々と名刺交換をさせて頂きました。その中で、広川町社協のコーディネーターさんがおられ、ご挨拶と「移動店舗販売車両」の増車予定がある事の話をさせて頂き、後日、あらためてご連絡をする事になりました。

令和2年6月19日　広川町と「移動店舗販売の実施に関する協定」を締結

◆令和2年１月末から広川町と移動店舗販売に関して協議・情報交換を行ってきましたが、お互いの意思が合致し、6月19日「広川町保健福祉センター・はなやぎの里」にて「移動店舗販売の実施に関する協定」の締結・調印式が行われ、移動店舗販売実施に向けて動き出しました。

◆7月21日、「移動店舗販売に来て欲しい」という要望のあった14行政区の区長を対象に、区長合同説明会を広川町とともに開催しました。

◆8月5日、8月18日の両日、役場・社会福祉協議会が中心となり、「移動店舗販売・体験会」を上記14行政区で実施し、実際にご利用される方々にも体現してもらいました。

◆体験会で、ご利用された利用者さんの要望等の声をもとに、役場・社協・エフコープで更に検討を重ね、今年の秋の「本格稼働」に向け、更なる連携を図り続けました。

令和2年10月19日～　広川町・移動店舗販売本格稼働

◆　10月19日から、14行政区・14か所で本格稼働を開始しました。
◆　その後も町で新たに集約された販売要望の行政区でデモ販売を実施しました。
◆　令和7年4月現在、23行政区・29か所で、移動店舗販売を稼働中です。
◆　今年の5月Ｇ・W明けから、新たに２か所、販売場所が増えました。
◆　新たに、4行政区（小椎尾・一条・草場・川瀬）から、体験会の要望の声あり。

「移動店舗販売」を通じての広川町とのつながり　※ 平時・日常的に

◆月に１度、広川町移動店舗販売に関する連絡会を実施（役場・社協・エフコープ）
※ 販売時の事例の情報共有・実績報告・今後の取り組み等の検討
◆広川町による「生活支援に関するアンケート」の現地実施
※ 目的①「移動店舗販売」が、個人あるいは地域の暮らしにどのような変化・効果を与えているのか、の検証
※ 目的②「調査結果をもとに、個人・地域の生活ニーズを捉え、今後、広川町において必要な取り組みを検討
◎　販売場所が、集いの場・憩いの場・見守りの場　⇒　地域のコミュニティの「場」になっている事も再認識。

◆上広川保育園 園児による「移動店舗販売」での買い物体験（3年連続）
◎　買い物支援活動だけでなく、幅広い世代がつながれる居場所の創出

◆令和5年12月「図書まつり・ひろか和のつどい」へ移動店舗販売出店
◆令和6年10月「広川まつり物産展」へ移動店舗販売出店

◎情報共有した方がいい事例は、日常的に報告・連絡・相談　※週次・月次での販売実績報告

令和5年7月10日(月)豪雨災害発生　※ 情報発信・共有

7月11日(火) 11時頃の移動店舗販売 販売場所付近情報・販売状況を広川町へ報告

広川町役場・広川町社会福祉協議会の皆様へ

今回の豪雨により甚大な被害となりました。心よりお見舞い申し上げます。

7月10日(月)は、大雨特別警報発表・避難指示発令となった為、「移動店舗販売」は、安全を最優先として「販売中止」の判断をさせて頂きました。

7月11日(火)の午前は、①「馬場区公民館」⇒「通常販売」②「鬼ノ渕区納骨堂前広場」⇒ 川を渡る橋が封鎖され、重機による流木の撤去、川沿いでは地域住民の方々による家財の運び出し、片付け等が行われており、販売を出来る状況ではありませんでしたので、「販売中止」の判断をその場でした。③「鬼ノ渕・野中様空き地」⇒「通常販売」　④「逆瀬谷共同浴場跡広場」⇒ 鬼ノ淵から逆瀬谷へ行く道路が「通行止め」の為、長延から逆瀬谷へ行くルートに変更し、逆瀬谷は「通常販売」

7月11日(火)の 午後は、「通常販売」を行いました。

被災された利用者さまへ、災害時の後片付けに重宝される「タオル」を無償で配布させて頂きました。

逆瀬谷では、「今日は来ない、来れない、と思ってたら、音楽が聞こえたから来たよ、来てくれてありがとう」というお声も頂きました。

広川町・被災者への災害支援物資お届け　※ みんなで考え、つなぎあう

7月12日　広川町社会福祉協議会 災害ボランティア開所　※激動の日々の幕開け
7月20日　広川町社会福祉協議会へボランティアさんの飲料等をエフコープ筑後支所からお届け
7月26日　広川町長より、「災害救助法に基づく生活必需品の調達及び輸送の協力依頼」が、エフコープ理事長へ提出される。

◆広川町役場と災害支援物資の内容・手配・お届けの仕方、スケジュール等について協議
※ 今現在、被災者が必要としている物資は何か？
※ 私たちの出来ることは何か？
を一緒に出し合い、それぞれが出来る事を共有

● 寝具・被服・家電・カセットコンロ等は、広川町(役場)で調達・お届け
● 衛生用品・台所用品・洗濯用品等は、エフコープ久留米店で調達・支所で荷造り・お届け
◆ 支援物資の申請状況確認、商品の手配・数量確保・荷姿づくり等の課題もあり、支援物資のお届けは、8月30日から開始
◆ 被災状況調査・機材調達・ボランティア活動等は、広川町(社協)で実践

エフコープ・広川町で情報共有

広川町様より要請があった7月の集中豪雨で自宅の冠水など被災された町民の方々への生活必需品のお届けを 8月30日(水)より開始しました。お届けは、南部ブロック担当2名、久留米支所のＥＶ車を活用しました。支援物資の内容は、被災されたご家庭の要望に応じて、2種類（1.石鹸やシャンプーなどの衛生用品セット・2.台所用洗剤や洗濯洗剤などの台所、洗濯用品セット）を久留米店にて調達し、エフコープロゴ入りの段ボール箱に詰めてお届けしました。

衛生用品セット

台所用洗剤洗濯洗剤セット

同封した町長からのメッセージ

9月14日迄に被災されたお宅 50軒へのお届けが完了し、10月12日迄に**計74軒**、被災されたお宅へお届けさせて頂きました。被災されたお宅の殆どが河川の横に家が建っており、あるお宅では、腰の高さまで浸水したと言われていました。ご高齢の方が多く、被災から2カ月が経過しても『家の中の片付けが進んでいない』とも言われてありました。お会いできた方には被災された時の状況をお聞きしていますが『近くの避難所へ行っていたので無事だった』と言われる方もおられました。ご高齢の方が多く、支援物資をお渡しして帰る際に、「ありがとう」「助かります」と深々とお礼を言われている姿が印象的でした。

持続可能な取り組みへ　地域貢献 ・ 暮らし貢献 ・ 事業貢献

事業推移

◆「供給高」	令和4年 ・ 1,590万	令和5年 ・ 1,735万	令和6年 ・ 1,800万
◆「利用者」	令和4年 ・ 8,300名	令和5年 ・ 7,700名	令和6年 ・ 7,100名
◆「一人当」	令和4年 ・ 1,916円	令和5年 ・ 2,253円	令和6年 ・ 2,535円

※　利用者数は、暮らしの変化 (施設入所・猛暑・極寒・体調不良・逝去等)が大きく影響。
※　一人当の買い物点数は、稼働開始時の平均8点から現在は平均12点へ
※　商品の値上げ、価格高騰もある中、利用点数が伸びている事は、特筆される。
「おせちの予約」・「恵方巻の予約」の取り組みも浸透し、供給高・利用者は、年々伸長。

◆利用者さんの暮らしの中で「お役に立ちたい」「喜んで頂きたい」そんな場面を数多く創りたい。

三位一体　連携　協働実践　そして「持続可能な事業へ」

利用者さん、地域の方々の暮らしを守り育てていく為にも「移動店舗販売」の灯を消してはいけない。その為にも持続可能な事業活動にしていく事が大切。利用者さん、地域の方々の暮らしを守り育てていきながら、事業利益(剰余)確保は、生協組織の発展、地域の暮らしの向上にとって、大切な意味を持つ。利益(剰余)を否定しては、最大奉仕の原則の目的も果たせない。

利用者さんの声、地域住民の「思い・願い」をしっかり受け止め、そこから生まれるニーズにきめ細かく対応する。暮らしの様々な問題を解決し、地域や社会に貢献していくことが私たちの役割。

但し、生協だけでは、なかなか出来ない事も多い。多くの人と心を合わせ、協働の力を発揮していくことが大切。広川町の皆さんの協力協働の力に感銘。

そして感謝の気持ちでいっぱいです。

皆さんと出会えて本当に良かったです。これからもよろしくお願い致します。

ご清聴ありがとうございました

“つながる”・“ひろがる”支援団体連携セミナー
参加者アンケート

今後の被災者支援に活かしていくため、アンケートにご協力をお願いします。

下記アドレスまたは二次元コードから、６月６日（金）までに回答いただきますよう、ご協力をお願いします。

【アンケート】

https://forms.gle/TXFa8WfMcnukwfhR6